

保育者・教育者を目指す学生の ピアノ実技能力育成における動画教材の有用性 ーオンライン授業・対面授業における活用の試みー

伊藤 憲孝

福山平成大学 福祉健康学部
(こども学科)

E-mail : noritakaito@heisei-u.ac.jp

【要旨】

本研究の目的は、保育者・教育者を目指す学生のピアノ実技能力の育成について、動画教材の有用性への知見を得ることである。本研究が対象とする保育者・教育者のピアノ実技能力は、日々の音楽活動を構想する時、あるいは幼児・児童へ音楽指導を行う際に大きく関わるものである。そのためピアノ実技能力は、保育者・教育者にとって必須のものであると言える。研究の方法は、稿者が作成した動画教材がどのように活用されたのかを、F大学ピアノ初心者に限定し、アンケート調査を行った。アンケート結果に基づき、保育者・教育者を目指す学生のピアノ実技能力の育成に関し、動画教材の有用性について考察を行った。

本研究を通し、次のようなことが明らかになった。対象となった学生は、動画教材を用いることで、演奏する作品の全体像や雰囲気をつかむための要素を理解できることに繋がっていることがわかった。一方で、表現の方法への関心は高くなく、動画教材で補助できる事項がピアノ技能を用い表現するところまでは補えていないことが分かった。表現に関する技能や、実際に演奏する際に必要な事項は、オンライン授業においてはLINEテレビ電話を使用した個別指導において、対面授業においては対面指導によって指導する必要があると言える。

KEY WORDS : ピアノ実技能力, 動画教材, オンライン授業

1. はじめに

保育・教育の実践現場において、保育者・教育者が日々の音楽活動を構想する時、あるいは幼児・児童へ音楽指導を行う時、ピアノ実技能力及び、その過程で学んだ音楽的知識が大きく関わる。そのためピアノ実技能力は、保育者・教育者にとって必須のものであると言える。金井（2017）が述べるように、ピアノはメロディーだけでなく和音を奏することができる数少ない楽器であり、音量や音域の広さなど、極めて高い表現能力を持つ楽器である。その表現能力の高さは裏を返せば、演奏することの難しさとも一体であると言える。しかしながら、養成校でのピアノ実技授業では、学生の読譜力など音楽的能力が育まれてから徐々にピアノ実技能力をつけさせることが時間的に困難であり、読譜等の音楽的知識と演奏技能を同時進行で行わざるを得ない。中でも大学入学後にピアノ実技に初めて取り組む「初心者」にとって、そのことは容易ではない。

渡会（2019）では、ピアノ実技能力向上に向けた動画教材の活用に関し、特に「初心者」にとって演奏の練習をしながら読譜能力が向上するなど、動画教材の有用性があるとの結論を得ている。一方で「中級」以上の学生にとって動画教材の活用は限定的であり「初心者」の用途との差異が報告されている。

そこで本研究では、渡会（2019）によって報告された成果をもとにしつつ、F大学のピアノ初心者にとって稿者が作成した動画教材がどのように活用されたのかを、アンケート調査することとした。アンケートはF大学学生の実情に合わせ作成し、結果に基づき、保育者・教育者をめざす学生のピアノ実技能力の育成に関し、動画教材の有用性について考察をおこなう。

2. 本研究の目的

本研究は、保育者・教育者をめざす学生のピアノ実技能力の育成について、動画教材の有用性への知見を得ることが目的である。

3. 本研究の方法

本研究は、事例としてF大学の稿者の授業（ピアノ奏法Ⅰ・ピアノ奏法Ⅱ）でおこなったピアノ実技指導（2020年実施）を取り上げ、その授業に参加し動画教材を活用した学生の意識を分析することにより、上記目的を果たす。意識の分析は受講学生のうち、本授業にてピアノ実技に初めて取り組む初心者6名に限定しおこな

ったアンケート調査を質的に分析、考察することによっておこなう。

4. 授業の概要

4. (1) 履修者と形態

1) ピアノ奏法Ⅰ（前期開講）

1年次生（全14名のうち初心者6名）が履修した。授業形態は、オンラインで実施した。

2) ピアノ奏法Ⅱ（後期開講）

1年次生（全14名のうち初心者6名）が履修した。授業形態は、対面で実施し、動画を補助教材として使用した。

4. (2) 内容

1) ピアノ奏法Ⅰ（前期開講）

オンラインで実施した。履修者を初心者と中・上級者の2つのグループに分け、内容を組み立てた。初心者には、椅子の座り方や指使いなどの基礎的な動画をはじめ、授業内で課題として取り上げた全22曲について、どのように練習し、どのように弾いていくのかを解説した動画を作成し、補助教材として使用した。中・上級者には別途ピアノのテクニックを抽出した動画を作成し、個々のテクニックの課題に応じて補助教材として使用した。これらの動画教材を併用しつつ、初心者、中・上級者ともに、当該授業時間にはLINEテレビ電話を使用し、個別に受講生の指導を行った。

2) ピアノ奏法Ⅱ（後期開講）

対面で実施した。履修者を初心者と中・上級者の2つのグループに分け、内容を組み立てた。初心者には、授業内で課題として取り上げた全15曲の解説動画を作成し、補助教材として使用した。中・上級者には別途ピアノのテクニックを抽出した動画の作成を継続し、個々のテクニックの課題に応じて補助教材として使用した。これらの動画教材を併用しつつ、当該授業時間には対面で受講生の指導を行った。

5. 初心者への意識調査の内容

5. (1) アンケート実施時期

2021年2月（当該授業終了後）

5. (2) 対象者

ピアノ奏法Ⅰ・ピアノ奏法Ⅱを受講した学生のうち、初心者6名を対象とした。

5. (3) 質問項目

1) ピアノ奏法Ⅰ：前期にオンラインのみでの実施

問1 動画教材について

- ① 動画教材を活用していますか。
いつも見ている/時々見ている/あまり見えていない/全く見えていない
- ② 動画教材をどのような機器で見えていますか。(動画教材を活用していない人は除く)
スマートフォン/タブレット/パソコン/その他
- ③ 動画教材の画質をどのように感じましたか。
とても良い/良い/少し良くない/良くない
- ④ 動画教材の音質をどのように感じましたか。
とても良い/良い/少し良くない/良くない

問2 動画教材の使いやすさ、及び使いにくさについて 当てはまるものを全て選んでください。

- ① 使いやすさ(複数選択可)
- ・どのような曲かわかる(曲の感じ)
 - ・鍵盤の位置が分かる(音の高さの確認)
 - ・曲のリズムが分かる
 - ・仕上がった時のテンポが分かる
 - ・指使いを確認することができる
 - ・表現の方法が分かる(強弱やアーティキレーション)
 - ・難しい箇所が分かる
 - ・練習の仕方が分かる
- ② 使いにくさ(複数選択可)
- ・どのような曲かわからない(曲の感じ)
 - ・鍵盤の位置が分からない(音の高さの確認)
 - ・曲のリズムが分からない
 - ・仕上がった時のテンポが分からない
 - ・指使いを確認することができない
 - ・表現の方法が分からない(強弱やアーティキレーション)
 - ・難しい箇所が分からない
 - ・練習の仕方が分からない

問3 上記の回答の他に、あなたが動画教材を用いた具体的な方法があれば教えてください。(自由記述)

問4 オンラインのみでの実施となったこの授業において、動画教材を用いた感想を教えてください。(自由記述)

2) ピアノ奏法Ⅱ：対面で実施(動画教材を併せて使用)

問1 動画教材について

- ① 動画教材を活用していますか。
いつも見ている/時々見ている/あまり見えていない/全く

見えていない

- ② 動画教材をどのような機器で見えていますか。(動画教材を活用していない人は除く)
スマートフォン/タブレット/パソコン/その他
- ③ 動画教材の画質をどのように感じましたか。
とても良い/良い/少し良くない/良くない
- ④ 動画教材の音質をどのように感じましたか。
とても良い/良い/少し良くない/良くない

問2 動画教材の使いやすさ、及び使いにくさについて 当てはまるものを全て選んでください。

- ① 使いやすさ
- ・どのような曲かわかる(曲の感じ)
 - ・鍵盤の位置が分かる(音の高さの確認)
 - ・曲のリズムが分かる
 - ・仕上がった時のテンポが分かる
 - ・指使いを確認することができる
 - ・表現の方法が分かる(強弱やアーティキレーション)
 - ・難しい箇所が分かる
 - ・練習の仕方が分かる
- ② 使いにくさ
- ・どのような曲かわからない(曲の感じ)
 - ・鍵盤の位置が分からない(音の高さの確認)
 - ・曲のリズムが分からない
 - ・仕上がった時のテンポが分からない
 - ・指使いを確認することができない
 - ・表現の方法が分からない(強弱やアーティキレーション)
 - ・難しい箇所が分からない
 - ・練習の仕方が分からない

問3 上記の回答の他に、あなたが動画教材を用いた具体的な方法があれば教えてください。(自由記述)

問4 対面での実施となったこの授業において、動画教材を用いた感想を教えてください。(自由記述)

6. アンケートの結果と分析

6. (1) ピアノ奏法Ⅰ

アンケートの質問と、質問に対する対象学生の回答は以下の通りであった。

6. (1) 1) 問1 動画教材について

- ① 動画教材を活用していますか。

表1にある通り、「いつも見ている」が3名、「時々見ている」が2名であった。また、オンラインでの実施にも関わらず、「あまり見えていない」と回答した者も1名

いた。

このことから、「いつも見ている」「時々見ている」と回答した5名の学生は、動画教材を活用した自宅学習を行いつつ、当該授業時にはLINEテレビ電話での個別指導を受けていたことが分かる。一方で、「あまり見えていない」と回答した学生は、動画教材をそれほど活用せず、LINEテレビ電話での個別指導を受けていたことが分かる。

表1 問1①

選択肢	回答人数
いつも見ている	3名
時々見ている	2名
あまり見えていない	1名
全く見えていない	0名

② 動画教材をどのような機器で見えていますか。(動画教材を活用していない人は除く)

表2のように、5名の学生がスマートフォンで視聴し、1名がパソコンで視聴していた。このことから、スマートフォンの画面サイズであっても的確な指導をできる動画構成が求められると思われる。

表2 問1②

選択肢	回答人数
スマートフォン	5名
タブレット	0名
パソコン	1名
その他	0名

③ 動画教材の画質をどのように感じましたか。

表3にある通り、「とても良い」が4名、「良い」が2名と良い評価であった。稿者が動画教材を撮影したのは自宅であり、その撮影機材は家庭用のハンディカムやタブレットを使用した。また、編集は無料のアプリケーションを使用し、映像制作の専門家が制作したものではないが、補助教材としては十分な質であったことが窺える。

表3 問1③

選択肢	回答人数
とても良い	4名
良い	2名
少し良くない	0名
良くない	0名

④ 動画教材の音質をどのように感じましたか。

表4にある通り、「とても良い」が4名、「良い」が2名であった。稿者が動画教材音声を録音したのは自宅であり、その録音機材は家庭用のレコーダーを使用した。また、音源編集は無料のアプリケーションを使用し、音響制作の専門家が制作したものではないが、補助教材としては十分な質であったことが窺える。

表4 問1④

選択肢	回答人数
とても良い	4名
良い	2名
少し良くない	0名
良くない	0名

6. (1) 2) 問2 動画教材の使いやすさ、及び使いにくさについて当てはまるものを全て選んでください。

① 使いやすさ(複数選択可)

表5によると、「仕上がった時のテンポが分かる」「どのような曲かわかる(曲の感じ)」「曲のリズムが分かる」など、演奏する作品の全体像や雰囲気を含むための要素に注目が集まっていることがわかる。一方で、「指使いを確認することができる」「鍵盤の位置が分かる(音の高さの確認)」など、実際の演奏に際して必要となる事項への関心はそれほど高くなく、また「表現の方法が分かる(強弱やアーティキュレーション)」への関心もそれほど高くない。これらのことから、対象学生は動画教材を演奏する作品の全体像や雰囲気を把握するために主に使用していたことが窺える。

表5 問2①

順	選択肢	選択数
1	仕上がった時のテンポが分かる	6
2	どのような曲かわかる (曲の感じ)	5
	曲のリズムが分かる	5
4	指使いを確認することができる	3
5	鍵盤の位置が分かる (音の高さの確認)	2
	表現の方法が分かる (強弱やアーティキレーション)	2
	難しい箇所が分かる	2
	練習の仕方が分かる	2

② 使いにくさ (複数選択可)

表6のように、「表現の方法が分からない (強弱やアーティキレーション)」「練習の仕方が分からない」のみ、選択された。

「表現の方法が分からない (強弱やアーティキレーション)」は、曲全体を把握し、曲想の表現へと進んでいく段階において理解をしておきたい事柄である。一方、表現するためには、演奏者が音色やフレーズなど様々な要素をイメージし、それらを具現化するための技術を必要とする。このことから、表現と技術の関連性への言及が足りていないことがわかる。

「練習の仕方が分からない」からは、実際にどのように練習すれば効率よく上達するのかを、明確に伝えることができていないことが窺える。

表6 問2②

順	選択肢	選択数
1	表現の方法が分からない (強弱やアーティキレーション)	1
	練習の仕方が分からない	1
3	どのような曲かわからない (曲の感じ)	0
	鍵盤の位置が分からない (音の高さの確認)	0
	曲のリズムが分からない	0
	仕上がった時のテンポが分からない	0
	指使いを確認することができない	0
	難しい箇所が分からない	0

6. (1) 3) 問3 上記の回答の他に、あなたが動画教材を用いた具体的な方法があれば教えてください。
(自由記述)

表7 問3

回答
特にありません。
動画の中の先生と合わせて弾いています。

表7のように、回答が寄せられた。「動画の中の先生と合わせて弾いています。」との回答は、予測していない動画の活用法であった。当然のことながら初心者学生にとって、ピアノを弾くことだけでなく、リズムやメロディー、ハーモニーといった音楽そのものを把握することも、決して易しいことではない。今後、「合わせて弾く」ことを想定した動画を作成することで、音楽に関する複合的な能力を育成できると思われる。

6. (1) 4) 問4 オンラインのみでの実施となったこの授業において、動画教材を用いた感想を教えてください。(自由記述)

表8 問4

回答
直接のアドバイスが貰えない中で、動画を見ることにより自分の判断でだけどこをこのように改善したら良いのかなとか考えた り、分からないところを何回も繰り返して見たりできるので良かった。
学校に行かなくても問題なくピアノの学習ができてよかった。
分かりやすかったです。
ピアノが全く弾けなかったので遠隔になるのは不安でしたが、動画が分かりやすく練習しやすいです。初めに比べてもすごく分かりやすくして下さっていて、動画の通りに練習すると弾けるようになるので嬉しいです。
どういったことが難しいのかがよく分かった

表8のように、回答が寄せられた。これを見ると、概ね肯定的に動画教材を用いていることがわかる。中で

も、「分からないところを何回も繰り返して見たりできるので良かった。」との回答は、何度でも視聴が可能で、なおかつ再生速度を変更することができる動画教材ならではの利点を、存分に利用していると言える。また、「初めに比べてもすごく分かりやすくしてくださっていて、動画の通りに練習すると弾けるようになるので嬉しいです。」との回答からは、オンライン授業実施当初に作成した動画教材と授業回数を経た動画教材とを比較し、感想を述べていることが窺える。当初作成していた動画教材は、課題とした作品の弾き方を解説していたが、授業が進むにつれソルフェージュの要素を組み込みリズム学習も併せて行った。また、メトロノームを使用した練習方法を組み込むなど、ピアノを弾く技能だけではなく音楽の仕組みを理解できるよう試みた。そのような工夫が受講学生に伝わっているものと思われる。

6. (2) ピアノ奏法Ⅱ

アンケートの質問と、質問に対する対象学生の回答は以下の通りであった。

6. (2) 1) 問1 動画教材について

① 動画教材を活用していますか。

表9のように、「いつも見ている」が1名、「時々見ている」が4名であった。また、「あまり見ていない」と回答した者は1名であった。

このことから、「いつも見ている」「時々見ている」と回答した5名の学生は、対面授業と併用して動画教材を使用し、授業時に個別指導を受けていたことが分かる。一方で、「あまり見ていない」と回答した学生は、動画教材をそれほど活用していなかったことが分かる。

表9 問1①

選択肢	回答人数
いつも見ている	1名
時々見ている	4名
あまり見ていない	1名
全く見ていない	0名

② 動画教材をどのような機器で見えていますか。(動画教材を活用していない人は除く)

表10のように、5名の学生がスマートフォンで視聴し、1名がパソコンで視聴していた。このことから、スマートフォンの画面サイズを想定した動画構成が求めら

れると感じた。

表10 問1②

選択肢	回答人数
スマートフォン	5名
タブレット	0名
パソコン	1名
その他	0名

③ 動画教材の画質をどのように感じましたか。

表11にある通り、「とても良い」が4名、「良い」が2名であった。稿者が動画教材を撮影したのは自宅であり、その撮影機材は家庭用のハンディカムやタブレットを使用した。また、編集は無料のアプリケーションを使用し、映像制作の専門家が制作したものではないが、補助教材としては十分な質であったことが窺える。

表11 問1③

選択肢	回答人数
とても良い	4名
良い	2名
少し良くない	0名
良くない	0名

④ 動画教材の音質をどのように感じましたか。

表12にある通り、「とても良い」が4名、「良い」が2名であった。稿者が動画教材音声録音したのは自宅であり、その録音機材は家庭用のレコーダーを使用した。また、音源編集は無料のアプリケーションを使用し、音響制作の専門家が制作したものではないが、補助教材としては十分な質であったことが窺える。

表12 問1④

選択肢	回答人数
とても良い	4名
良い	2名
少し良くない	0名
良くない	0名

6. (2) 2) 問2 動画教材の使いやすさ、及び使い

にくさについて当てはまるものを全て選んでください。

① 使いやすさ（複数選択可）

表13によると、「曲のリズムが分かる」「仕上がった時のテンポが分かる」「どのような曲かわかる（曲の感じ）」など、前期に実施したピアノ奏法Ⅰと同様に、演奏する作品の全体像や雰囲気や掴むための要素に注目が集まっていることがわかる。また、「鍵盤の位置が分かる（音の高さの確認）」など、実際の演奏に際して必要となる事項への関心はそれほど高くなく、また「表現の方法が分かる（強弱やアーティキレーション）」への関心もそれほど高くないこともピアノ奏法Ⅰと同様の傾向であった。一方で、「指使いを確認することができる」を選択した学生は1名のみとなり、徐々にピアノを弾く際の指使いを自身で決定できるようになっていることが窺えた。以上のことから、対象学生は動画教材を演奏する作品の全体像や雰囲気を把握するために主に使用していたことが窺える。

表13 問2①

順	選択肢	選択数
1	曲のリズムが分かる	6
2	仕上がった時のテンポが分かる	5
	どのような曲かわかる（曲の感じ）	5
4	鍵盤の位置が分かる（音の高さの確認）	2
	表現の方法が分かる （強弱やアーティキレーション）	2
	難しい箇所が分かる	2
	練習の仕方が分かる	2
	難しい箇所が分かる	2
	練習の仕方が分かる	2
10	指使いを確認することができる	1

② 使いにくさ（複数選択可）

表14のように、「表現の方法が分からない（強弱やアーティキレーション）」「難しい箇所が分からない」のみ、選択された。

「表現の方法が分からない（強弱やアーティキレーション）」からは、表現とそれを具現化するための技術の関連性への言及が不十分なのことがわかる。

「難しい箇所が分からない」からは、作品全体におい

てどの部分が技術的に困難なのかを、明確に伝えることができていないことが窺える。

表14 問2②

順	選択肢	選択数
1	表現の方法が分からない（強弱やアーティキレーション）	1
	難しい箇所が分からない	1
3	どのような曲かわからない（曲の感じ）	0
	鍵盤の位置が分からない（音の高さの確認）	0
	曲のリズムが分からない	0
	仕上がった時のテンポが分からない	0
	指使いを確認することができない	0
	練習の仕方が分からない	0

6. (2) 3) 問3 上記の回答の他に、あなたが動画教材を用いた具体的な方法があれば教えてください。（自由記述）

表15 問3

回答
特にありません。
先生と合わせて弾いています。

表15のように、回答が寄せられた。「先生と合わせて弾いています。」との回から、「合わせて弾く」ことを想定した動画を作成するの必要を感じた。初心者学生にとって、ピアノを弾くことだけでなく、リズムやメロディー、ハーモニーといった音楽そのものを把握することも、決して易しいことではない。「合わせて弾く」ことで、動画での学習が進むにつれ、音楽に関する複合的な能力を育成することができると思われる。

6. (2) 4) 問4 対面での実施となったこの授業において、動画教材を用いた感想を教えてください。（自由記述）

表16 問4

回答
初めて見たり聴いたりした曲でイメージがつかないが、動画があることによって曲のイメージ、テンポだったりとなんとなくの感じが分かるのでたすかった。
好きな時に動画を何度も見返してできるのが便利だった。
後期もとても分かりやすい動画でした。
聞いたことある曲でも、早さなどがよくわからないため、とても役立った。
より見やすく、分かりやすくなっていてとても使いやすいです。
だんだんいろんな曲が弾けるようになるのが楽しいし、嬉しいです。
どういったことに気を付ければいいのかがよく分かった

表16のように、回答が寄せられた。これを見ると、概ね肯定的に動画教材を用いていることがわかる。中でも、「好きな時に動画を何度も見返してできるのが便利だった。」との回答は、繰り返し視聴が可能な動画教材の利点を生かしていると言える。「聞いたことある曲でも、早さなどがよくわからないため、とても役立った。」との回答からは、演奏する作品の細部のみならず、全体像の把握にも動画教材が貢献していることが窺える。また、「より見やすく、分かりやすくなっていてとても使いやすいです。」との回答からは、前期に実施したピアノ奏法Ⅰの動画教材と後期に実施したピアノ奏法Ⅱの動画教材を比較し、感想を述べていることが窺える。ピアノ奏法Ⅰで用いた動画教材は、1つのアングルから作成していたが、ピアノ奏法Ⅱでは視聴画面に、横からの視点、上部からの視点、楽譜の3つの視点から撮影した画像を組み合わせ作成した。このような複数の視点を1つの画面に落とし込んだ工夫が受講学生に伝わっているものと思われる。

作成した動画の例



ピアノ奏法Ⅰ（前期）



ピアノ奏法Ⅱ（後期）

7. まとめ

前節においてアンケートの各設問への回答に対する個別の考察をおこなった。本節では、研究の目的を踏まえ、保育者・教育者を目指す学生のピアノ実技能力の育成について、動画教材活用の有用性について知見を得る。

まず、ピアノ奏法Ⅰ・ピアノ奏法Ⅱのアンケートに対する回答から共通して読み取れたのは、大半の学生が動画教材を視聴し、学習に活用していることである。また、スマートフォンでの視聴が中心であり、視聴に際しての画質や音質は十分であると感じていた。このことから、スマートフォンの画面の大きさや機器のスピーカーの音質、またイヤホンやヘッドホンでの視聴を想定した指導法を構想し実践することは、教育効果の有無に大きく関わっていると言えるだろう。

次に、動画教材の使いやすさについては、「曲のリズムが分かる」「仕上がった時のテンポが分かる」「どのような曲かわかる（曲の感じ）」など、ピアノ奏法Ⅰ・ピアノ奏法Ⅱともに、演奏する作品の全体像や雰囲気を持つための要素を理解できることが、使いやすさに繋がっていることがわかった。一方で、動画の使いにくさについては、「表現の方法が分かる（強弱やアーティキュレーション）」への関心が両授業ともに高くなく、動画教材

で補助できる事項がピアノ技能を用い表現するところまでは補えていないことが分かった。「表現の方法が分かる（強弱やアーティキレーション）」や、ピアノ奏法Ⅰで選択された「練習の仕方が分からない」、ピアノ奏法Ⅱで選択された「難しい箇所が分からない」など表現に関する技能や、実際に演奏する際に必要な事項は、オンライン授業においてはLINEテレビ電話を使用した個別指導によって、対面授業においては対面指導によって指導する必要性を感じた。

動画教材を用いる方法では、「動画の中の先生と合わせて弾いています。」との回答が、稿者の予想しないものであった。使用した動画共有サービスは、再生速度を自由に変更することができる。速度変更機能を使いながら、動画内の演奏と合わせて練習することで、理解を深めたものと思われる。

動画教材を用いた感想は、ほぼ好意的な反応が占めていたと言える。中でも、「分からないところを何回も繰り返し見て見たりできる」や、「好きな時に動画を何度も見返して見返して見たりできる」など、動画教材ならではの利点を活用していることが窺えた。

総じて言えることであるが、概ね動画教材を使用したオンライン授業及び対面授業は、好評であった。そのため、保育者・教育者をめざす学生のピアノ実技能力の育成について、動画教材の有用性への知見を得ることができたと考える。今後も動画教材のさらなる改善を進め、学生のピアノ実技能力育成へと寄与したい。

8. 参考引用文献

- 1) 金井玲子 (2018) 「保育者養成課程におけるピアノ指導—こどもの表現活動を活性化させるピアノの活用とその指導法—」『浦和論叢』第58号, P121-P134
- 2) 渡会純一 (2019) 「ピアノの演奏技術向上に向けた動画教材の活用の試み —「表現技術Ⅰ(音楽)」での実践より—」『教職研究』2019, P163-P176
- 3) 小倉隆一郎 (2014) 「子どもの歌の弾き歌い学習におけるネットレッスンの活用」『文教大学教育学部紀要』第48巻, P137-P144
- 4) 小倉隆一郎 (2015) 「子どもの歌の学習支援にオンラインストレージとSNSを利用する試み」『文教大学教育学部紀要』49巻, P223-P229
- 5) 深見友紀子 (2009) 「ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題」『京都女子大学発達教

育学部紀要』第5巻, P31-P40

- 6) 長嶺章子 (2017) 「ピアノ弾き歌い学習支援におけるICT利活用の効果と課題」『植草学園短期大学紀要』第19巻, P11-P20
- 7) 辻陽子 (2019) 「保育者の資質・能力育成を見据えたピアノ学習の方法論的検討：ソナチネ及びブルグミュラーの活用」『岡山県立大学教育研究紀要』第3巻1号, P10-1-P10-1-10

Usefulness of Video Teaching Materials for Developing Practical Piano Skills for Students Who Aim to Become Nursery Teachers and Educators -Attempts to Utilize in Online Lessons and Face-to-Face Lessons-

Noritaka ITO

Department of Childhood Education,
Faculty of Welfare and Health Science,
Fukuyama Heisei University

Abstract

The purpose of this study is to obtain knowledge about the usefulness of video teaching materials regarding the development of practical piano skills of students who aim to become nursery teachers and educators. The piano practical skills of nursery teachers and educators, which are the subjects of this study, are greatly related to the planning of daily music activities and the teaching of music to infants and children. Therefore, it can be said that piano practical ability is indispensable for nursery teachers and educators. The research method was limited to beginners of piano at University F, and a questionnaire survey was conducted to find out how the video teaching materials created by the author were used. Based on the results of the questionnaire, we considered the usefulness of video teaching materials regarding the development of practical piano skills for students who aim to become nursery teachers and educators.

Through this research, the following became clear. It was found that the target students were able to understand the elements for grasping the overall picture and atmosphere of the work to be performed by using the video teaching materials. On the other hand, there was not much interest in the method of expression, and it was found that the matters that could be assisted by the video teaching materials could not be supplemented to the point of expressing using piano skills. The teaching of skills related to expression and matters necessary for actual performance whether taught using LINE videophone in online lessons or by face-to-face guidance in face-to-face lessons each require a specific approach.

KEY WORDS : piano playing, video teaching materials, online lessons